

Member's Forum

会員投稿の頁



U-35委員会企画

talk baton 08 活動報告

talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などざっくばらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>



本町駅にほど近い隠れ家のようなバー「OSAKA SALON」。片山氏の友人のフランス人、ジャンが経営する。1階の居酒屋「百樹」とともに、片山氏が足繁く通うお気に入りの場所。日常業務を終えたばかりの設計者たちが集まり、おしゃれなブルーのジャケットを身にまとった美容師との異色のトークイベントが開催された。パワーポイントなどのスライドや資料を一切使わない語りオンリーの建築と美容についてのトークバトン08。

■ものづくりへの憧れ

片山「16歳で美容師を目指しました。父はサラリーマンでしたが、3つ上の兄は日展の彫刻部門で特選を受賞する彫刻家。昔から何かを創りたいという思いが強かったんだと思いますが、特に兄の影響が大きかったんだと思います。」美容師の前はカメラマンか建築家になりたかった時期もあったと語る。美容師という職業柄、接客中のおしゃべりにより、たくさんの建築設計者や様々な分野のデザイナーの知人も多く、興味のあるデザインや建築についてもとても詳しい。最近では2月にOPENした自らのサロンの解体工事のほとんどをセルフスクラップで実施し、店舗内装も建築家とともにデザインした。店舗内は落ち着きと温かみのあるリラクゼーションサロンとなっている。

■20代での苦悩

片山「もともと手先も器用で、美容師となった20代前半は何でもすぐにできました。大した努力もしないで自分は何でもできると思っていましたね。」

ところが、25歳で通用しなくなった。美容コンテストでこれまで自分が指導してきた、後輩に惨敗する。天狗だった鼻をへし折られた。努力不足と自己流による技術不足がコンテストの舞台ではっきりと表れてしまったと言う。

片山「今考えると、あのときが人生のターニングポイントだったんだと思います。」

期せずして追い込まれた人生に腐らず、持ち前の負けず嫌いの性格により、すぐに前を向くことができた。「上がるしかないと思った。」と語る。

■世界大会で残した経験と実績

2010年、2年に一度開かれる美容の世界大会がドイツで開催される。なんとしても出場するという意気込みで心機一転、これまで住んでいた住居からも引っ越し、彼女とも別れ、全く新しい環境の中で、技術の向上に努めた。

片山「まさしく新しい自分を創っていくという感覚でした。」その年の日本大会で見事優勝し、6泊7日のドイツ大会に出場を決めた。初の世界大会ではカット&ブロー部門で個人7位、日本代表ヘアショーでシルバーメダルという成績を残した。

片山「世界の舞台の表彰式での『JAPAN!!』は震えた。あの感動は麻薬。」絶対に次の大会でもっと結果を残すというモチベーションがさらなる美容技術の飛躍を生んだ。

続く2012年のタイ大会は日本代表チームのリーダーとして出場し、日本代表ヘアショーとあわせて、個人でもブライダル部門で準優勝（シルバーメダル）を果たす。このとき自分は美容師として今後も生きていくという決意ができたという。



何も資料を用いないトークのみ



片山氏の新店舗



バーの屋根裏空間でのトークイベント風景

Member's Forum

会員投稿の頁

■頭の中だけの美容設計図

片山「カットにも設計図があるんですよ。」基本的には通りに対して何度で引くかという設計図だ。美容独特の言葉で「引く」という言葉は、頭の球体形状に対して櫛をまっすぐに引き、直線と直線とを組み合わせて曲面を3次元で創りだしていくことを示す。

片山「何気なく引くのではなく、1本1本意味のある線として引き、頭の中にだけある美容設計図に基づいてカットしている。」カット中、自分が何回引いたか、完成までにあと何回引くかはほぼ完璧にわかっているという。建築設計者としてなんとなく設計図を引いたことがないか、常に自分が引く線に意志をこめているか、少し心が痛くなる発言であった。

片山「ブライダルなどで用いるアップスタイルは特に建築に似ています。」アップスタイルはいかに少ないピン（柱）で髪を留めるか、構造的になりたせるかが醍醐味となる。

片山「どこにピンを打つか。多く打つと誰でも留めれるけどそれじゃあグサいでしょう？」

少ないことのかっこよさ、ミース・ファン・デル・ローエのless is moreのようだ。さらに、片山氏は続ける。

片山「一人一人異なる髪質と対話しながら、ピンの位置を的確に決定する。どうやって成り立ってるのかわからせない、驚きのある支持方法ってのは技術と感性ですね。」片山氏の語る通り、設計者や施工者が想定外の事象と格闘しながら現場を納めていくことや、少ない柱やキャンチレバー構造などで一見不安定に見える建築が、こまやかな構造検討によりダイナミックで美しい建築となることと大いに通じる。

生きた髪と正確に対話していくことで最終的に美しい設計図が頭の中に生まれるのである。

■カットチェアは使わない

カットする上で普段から大切にしていることについて伺った。

片山「最近特に、自分の体の使い方を求めています。いかに良いものを創るかは、自分の体とそのバランスにかかっていると感じています。正確に体を使い高い技術でカットすることで、長持ちする持続的なカットができるんです。美容師としては、経営的に早く来てほしい気持ちもなくはないんですが、僕は3カ月保つことのできるカットを心がけています。」

美容師がよく利用するカットチェアを片山氏は使わない。

片山「カットチェアに座ると横の動きしかできなくなるんです。それは3次元じゃないんです。体を100%使えていないということなんです。」片山氏は何が正しいのかわからない出口のない技術の追求であると言うが、自分の体をどう使うのか？が今のテーマのようだ。

※カットチェア：美容師カット中に座る椅子

■主人（あるじ）にストレスなく

片山氏は自分の左手（櫛を持つ手）を「主人」と呼ぶ。自分の技術を正確に伝える定規だという。ちなみに片山氏は右利き。自分の主人がストレスなく引けるように自分が気を使う。常に思い通りの角度、強度で定規を添えられるように自分が動く。10万本の髪に線を引く作業は日々の鍛錬によって培った技術によって成り立っている。

■美容師と一緒につくり上げる職人

美容師は一見華やかなイメージの職業だと考える人が多いが、片山氏は美容師を黒子の職人だと考えている。

片山「お客さんは自分の思ったヘアスタイルにしてくれる美容師がうまい美容師だと思っているんです。寸分狂わない正確なカットを施しても思ったものと違うと満足してもらえない。」若い美容師に多いメディアを意識した華やかなカットではなく、お

客さんの要望をいかに実現できるか。

その為の技術とアイデアの引き出し、感性や感覚を磨くことが大切だと考える。そういう意味で美容師は決して華やかな職業なんかではなく、とても地味だと言う。

ただ、同時に要望にこたえ、さらなる提案も行う。最終的に当初の要望とまったく異なるスタイルとなることももちろんある。対話しながらお客さんと一緒に創りあげていく共同作業でこそその人に適したよいカットが生まれる。知らない間に美容師によって教育されていることもあるはずです。とのこと。

本当に日々の設計業務の中で建築主に対して考えていること、そのものではないかと感じる。

■これからのこと

片山氏は今後、独立し、一国一城の主となる。（2015年10月時点 ※2016年2月に独立し新店舗をOPEN）

片山「業種問わずだと思いますが、今後僕たち35歳世代がすることはどれだけ自分のことを超えられる人材を育てていけるか。ではないだろうかと思っています。自分の店をもち、今後美容師を雇っていく立場となった今、自分の発言で人の人生を変えてしまう可能性があることに対して恐怖も感じています。自分の思い通りというよりは調和と協調による切磋琢磨が大切だと感じています。」

また、美容師としてできることとして、お客さんへの技術の提供だけでなく、美容師の地位向上と店舗を構える地域の発展まで見据えている。

片山「職業なんて単なるフィルターです。建築家も美容師も自分が人として豊かで楽しい生活を送っていないと、いいものなんか創れません。一緒に頑張りましょう。」

| talk baton 08 を終えて

今回のテーマは「建築と美容」。鉛筆と想像力でまだ見えない空間を創り出す建築家。鋏とイメージでまだ見えないヘアスタイルを生み出す美容師。ともに創造性を職能とした非常に深い共通点を感じることができた。

対 談 日：2015.10.26
場 所：OSAKA SALON
（大阪市西区）
モデレーター：宮武 慎一
（安井建築設計事務所）



美容師と建築家は似ていると語る片山氏の逆毛実演



ジャンのバーでの延長トーク